
カロンの骨

和呼之巳夜己

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カロンの骨

【Nコード】

N9017E

【作者名】

和呼之巳夜己

【あらすじ】

あるところに死者蘇生の研究第一人者、カロンという少年がいた。そしてその助手の元何らかの組織の重鎮メリア。そしてカロンを憎み、メリアと通じる死者蘇生の研究者、セロン。この三人が生み出すのは、破滅か、恐怖か。今、一度死した者達にやり残したことをするために、一週間という期限付きでの生き返りを許すカロンは何をたくらんでいるのか……。総勢七名の死者と、二人の生者が繰り広げる人生相談室【？】カロンの生存が意味する答えとは……。

いろいろありまして終わりました。とはいえまだなんか違う気がするのですが……。結果的に最後は切り裂きジャックとかぶせてしまったことから見て、同じ世界での出来事だそうです。

一人目 田沼俊之の場合・・・親友（前書き）

カロンの骨 全七話予定。

一人目 田沼俊之の場合・・・親友

一人目 田沼俊之の場合

「蘇生者、確認。これより、生者へと変えます。」

若い女の人の声が室内に木霊する。

「許可する。」

「了解！ミスター・カロン」

カロンと呼ばれた男は、いつも仮面をかぶっていた。しかしこの部屋にいる唯一の人間の女性ですら、カロンの素顔を知らなかった。

この文だと、カロンは人間ではないのか？と思うが人間である。いや、人間であった・・・が正しいのかもしれないが。とりあえず、カロンは手に持ったグラスに液体を注いだ。赤い、半透明の・・・。そのままグラスを一回転させて、元通り手に持った。ぐいっと一息で飲むと、カロンは問う。

「今回の蘇生者は？」

女性はファイルをめくり、目的のページを読み上げる。

「今回の蘇生者は、田沼俊之。たぬまとしゆき年齢は、27の男性。職業は、名波社の営業マンです。」

カロンは眼を細めて尋ねる。

「と言うことは、あの有名な派遣会社にも関わっている？」

「ハイ。カロン。彼の死因は崖からの転落。原因は友人の池知芳正いけちよしまさの多額の金目当ての犯行と、警察は考えています。」

「ふむ、実際は？」

「我がシステムの計算によると、俊之が殺された理由は・・・いえ。逆に理由などありません。神の気まぐれというか、運の悪さというか・・・あやふやですね。」

カロンはグラスを目の高さに掲げるとつぶやいた。

「・・・。事故・・・か。」

「ハイ。カロンの。そう言うことになります。」

カロンは事実を聞くと、グラスをおいて、目をつぶった。

「何をしているんですか？カロン。」

カロンは目を開けずに答えた。

「何をしているんだ。君も、早くこの青年に黙祷したまえ。」

女性も直ぐに目を閉じて黙祷をした。

「よし。黙祷は終わりだ。」

「死者組成、充電完了。」

カロンは、アニメの船長のように人差し指で前を指して、叫んだ。

「発射！」

「カロン。発射ではなく、乱射です。」

あろう事にカロンはボタンを押し間違えていた。

「……………なおしたまえ。」

女性は、仏頂面で答えた。

「はい。」

俺は、今どこにいるんだ？

暗い・・・暗い空間で、一人の男が自分に問う。
自分は何でここにいるんだ？

そのうちに一人の男は、激しい頭痛で思い出した。

俺は、一人の男に殺された・・・。

暗闇の中で、男は、激しく憎悪を煮やした。

憎い・・・。この俺を、殺したあいつが憎い・・・。

男は、そう思う中で一つの疑問を見つけた。

あいつは・・・。芳正が、俺を殺したのか？いつもともにいた？

男は、そう思った次の週間、光に包まれた。しかし、冷房が効いた部屋に突如出されたため、男は、噓をした。

「俊之君。これから君に一週間の人生を与える。その間にやり残したこと、知りたいことを、知るのだ。そのために、まず、この服を着るのだ。その恰好では、外にでたとたんに警察に掴まって、一週間が無駄になるからな。」

男は・・・俊之と呼ばれた男は、自分の体をみた。全裸だ。通りで寒いはずだ。

「ありがとうございます。」

俊之は素直に服を受け取ると、下着に足を通した。ふと気が付いて、先ほど自分に服をくれた男に話をしようと思った。

「あの、・・・？」

男は消えていた。どこにもいない。

歴史をかえることは出来ない。

あの男の声で、頭の中にそう聞こえたような気がした。

俊之は袖を通すと、目の前に見えている群青の扉を開ける。

「カロン。せめて死者蘇生の人に、最初から服を着させることは出来ないのですか？」

カロンは、手に持った買い物袋に目をやり、答えた。

「そしたら、渋谷で買い物するという、私の楽しみがなくなるだろう？ わからないのかね？」

何を考えているのか全く分かりません。女性はそう答えようとして、止めた。カロンが包丁を研いでいたからだ。

「ふふ。賢くなったね。メリアも。」

「その名前は・・・止めて下さい。」

「じゃあ何かい？ P - 4087」

メリアと呼ばれた女性は、服の袖から、千本じょうろを出してカロンに投げつけた。

「ふふ。そう言うところが、まだ君の組織抜けが出来てないと言う一つだよ。・・・・。一つ聞こう。君は、セロンとあっているね？」

メリアは唇を噛んでこっそりと深呼吸をしてから、答えた。

「プライベートな時間ぐらい、私にあっても良いはずですが？」

カロンは、むうと言う声を出してから、答えた。

「それを言われると僕としても反論できないな。やっぱり、賢くなつたんじゃないかい？メリア。」

メリアは立ち上がると給湯室へと直進した。

「おい、メリア。壁を壊して本当に直進しなくても良いだろう！修理代も馬鹿にならないんだぞ？今の時代。」

僕が開けた扉からだと、芳正に電話した。一週間後登山に行こうと。・・・・僕のにどめの人生の最後の日に行こうと。

それから一週間が経ち、行ってみると、そこはいつもの山だった。そこには、芳正が座って、僕のことを待っている。

「どうしたんだよ。俊之。」

どうやら、僕はまだ死んでいないらしい。それが、この六日間で分かった。

「芳正。今日こそあの山を越えようぜ。」

僕は不思議な気持ちになった。自分を殺したかもしれない相手と、これからまた殺されようと思うなんて。

芳正と他愛もない話をしているうちに、休憩所は、ゴミのように小さくなった。まるで、綿埃のように。

そして、僕は、自分の死に場所にきた。崖には近づくまいと思うのに、体が勝手に動いていく。これが歴史は変えられないと言っていることか。芳正も近づいてくる。止める。来るな・・・来るな・・・。

芳正は、崖に腰掛け、座った。そして僕の体も勝手に。

「夕日が綺麗だなあ。」

芳正が、のんきに僕に話しかける。これから僕を殺すって言うのか。お前は親友一人殺すのも、何とも思わないのか。それとも、お前からみて、俺は親友じゃないのか？

風が吹いた。立とうとしていた僕の体が、風に押される。

「お・・・わわっ」

さらに強い強風が、僕の体を押した。

僕の目には、芳正が映る。芳正は急いでたって、僕の体を・・・どこでも良いからつかもうとする。でも、僕の体はドンドン落ちていく。

芳正の耳に、頭の碎ける音が聞こえた。

僕は親友に殺されてはいなかった。

僕は親友を親友として、死んでいけた。

僕は、

僕は、

「どうだったかね？田沼俊之君。君の最後は」

いつの間にかあの部屋にきていて、目の前にはあの男が立っている。

「親友の・・・大切さが分かった。」

「ほう・・・やはり、人生には友人というものが必要なのかね？」

「当たり前だ。友人がいたから・・・・・・芳正がいたから、俺は楽しかった。誤解を解いてくれて、ありがとな。」

男は手のひらをみて、たぶん僕に言った。

「親友は大切。」

僕は再び、暗い・・・暗い空間にいた。でも、心の中は、とても明るかった。

「メリア。私は友人がいかに大切か知った。だから友人を連れてきたぞ！名前は、パロというそうだ。」

メリアはカロンのほうを向いた。

「ワン！」

メリアがみたものは犬だった。カロンは友人の何たるかを、まだ知らない。

これもまあ、種族をこえた友人なのかもしれないが……。

同時刻、別の場所で。

「すまぬ。許してくれ……。この……。愚かなセロンを……。」「セロンと言った青年は、誰かの墓の前で、必死に謝っていた。」

彼の名は、セロン。カロンの親友であり、メリアと恋人で、そして、死者蘇生の二人目の学者。

「カロン、私は、おろかだった。カロン。君と僕との呼び名だ。僕はセロン。けれど君が決めたこの僕の名前は、もう使えないな……」

セロンと名乗る青年は、必死に彼のカロンの墓の前で頭を下げ続けた。

あと六人

一人目 田沼俊之の場合・・・親友（後書き）

カロンの骨 後六話予定

二人目 永井光明の場合・・・愛人（前書き）

二人目は、派手な激闘ありつ。

三人目は・・・兄弟愛で描く。

二人目 永井光明の場合・・・愛人

二人目 永井光明の場合

「ワンワンッワンワンッ。」

カロンの親友パロが、研究所を走り回る。

メリアは手元にある銃の引き金を引いたらどれだけ楽かと想像すると、とても気持ちがりフレッシュできるのではないかと、淡い想像をした。

「ダメだよ。メリア君。彼は僕の大事な親友なんだからね。」

最近ではメリアと呼ばれることに、負けた。カロンの執着心は怖いからだ。

「親友なら、きちんと首輪をまいて、檻にでも入れたらどうですか。」

メリアの提案にカロンは仮面の中でむっとした。

「メリア君。君は大切な親友をペットのように扱えというのかね。」

それとも君にとっての親友はみなペットと同類扱いされているのかい？」

カロンは想像したのかぶるりと身を震わせた。

「怖いこわーい。」

メリアは先ほどの想像の的をパロではなく、カロンに変えて乱射したいとさえ思った。

「さて、メリア君。仕事だよ。今回の蘇生者は？」

「永井光明あの宝くじで一発当てた人で、愛人に殺された事になっています。」

「ふむ。では、蘇生開始。」

なあ、貴子。

俺たちってそんなもんだったのか……。

貴子。言ってくれば君にも分けた。

一方的になんてひどいじゃないか。

何で僕は殺されたんだい。

愛し合っていたはずなのに。

そうじゃなかったのかい。

お金は人を変えてしまうんだね。

僕はあんなもの、もういないよ。

「さてと、君はこのたび、生き返りのチャンスを手にした。一日で、君の死の原因を改善しなさい。本来なら一週間なんだけど、システムがバグっちゃって。」

男は紙袋を手渡す。

「君が生前着ていた服は、君には似合わないよ。僕がきちんとチョイスしたから、これを見習ってほしいよ。きちんと似合う服装を。君は元がいいんだから。そんなちゃらちゃらしたものはずしてさ。」

光明は「何だよ。」と心で悪態をついた。

「それぞれ、心の中でブックサ言うのも、やめたほうがいいよ。嫌われちゃうから。」

光明は、しぶしぶ中から服を出し、着てみた。

「おお。似合う似合う。」

拍手して、男は消えた。

「幻影なのか？」

コけコッコー。

農場育ちの光明は、鶏に早朝、起こされる。これは、いつでもそうだった。修学旅行のときは、なんだかんで早起きだったし……。やっぱりそれが癖というか習慣に変わってきてしまっているんだとおもうと光明はため息を付いて、パジャマから着替えようとした。「あれ？」

夢ではなかった。死んで、生き返る夢では。服装がそれを証明してくれた。

自分は一回死んでいる事になる。

お笑い芸人の歌が、携帯から鳴り響く。

「貴子……。」

メールが来ていた。送り主は、愛人の片桐貴子。三年目。

「今日会おうよ……か。」

俺は即答で返事をした。

いいよ。いつもの場所です。

机にはいくつもなれべられたスーツケース。

すべてはつながった。

俺は一人でそう思った。これから、俺は殺されるんだ。そう思った。

日付けは、記憶の最後の日にち。俺の死んだ日。

机に放置されたダガーナイフ。これを持ち歩く事は違法だ。禁止されている。つかまる。

俺は決心した。どうせ死ぬなら……。

「遅いよー光明いー。」

貴子が手を振って俺を呼ぶ。俺は走って、貴子に歩み寄った。貴子がささやいてきた。

「ねえ光明。私さ、お金が……ほしいんだけど。分けて……くれない。」

遠慮しがちに、貴子は言った。

「俺が当てたものだ。お前が俺を殺してまで、ほしいんだろ。じゃ

「あ、俺は、殺される前に殺してやるよ……。俺が生きたために。」

それを見ていたカロンは、あのワイングラスを一回転させ、飲み干した。

「人間とは、自己中心的なものだ。そうは思わないかい、メリア。」
必死にメリアは、パロの妨害を防ぐプログラムの強化を進めていた。
「寂しいなあー。」

ダガーナイフが、貴子に刺さるはずだった。

「そこまでわかってんだったら、いう必要はないわね。」
貴子はコンパクトナイフを出し、俺に切りかかる、人のいない公園で。

二人とも、剣道の有段者。一步も引けを取らない。

そのうちに、貴子の手が汗でぬれる。

俺の手も、汗で滑る。

「メー……。ンッ。」

俺が、ナイフを振り下ろす。

彼女が、脚で蹴り上げる。

そこから、俺の意識が、朦朧とする。一コマずつに見える。

ナイフ、飛ぶ。上、行く。

彼女、走る。俺に、刺す。

俺、止まる。目、つぶる。

俺、意識薄れる。

彼女、バックステップ、下がる。元の位置。

彼女、上、ナイフ、落下。ナイフ、空気、切る。

彼女、悲鳴。悲鳴、終わる。公園、警察、来る。

俺、死ぬ。

彼女、消えた？

「どうだったね。彼女は必要か？」

あの男が俺を見下ろして聞く。腰に手を当てている。えらそうだ。
「当たり前だ。私はえらい。君が体験したあれだって、私の研究の成果だからな。」

バックステップで下がる男は言う。

「あれは凄い。かつこよかったぞ。それと金は、親が老後のために・
・っってもらっていたぞ。君の金。人間の友情ももろい。肉親との関係も。すべてが。」

「うる・・・さい。」

俺はやっとの事で声を出す。

「さて、ここで問う。愛人は必要かな。」

俺は考えていう。

「あいつみたいな何かに取り付かれたのはいやだ。普通のやつがい。
い。」

俺はそういった。

「そうか。参考にさせてもらう。ありがとうだ、それでは、お幸せ
に。」

男が、俺の前から消える。「違うぞー。君が俺の前から消えたんだ。

「男が頭の中にまで入ってくる。邪魔するな。」

「メリア。彼から愛人の必要さを学んだ。私の恋人になってくれ。」

「嫌です。」

私は彼のほうを向きながら、答えた。

「ふうむ。これが失恋か。案外堪えないな。堪えるというのはでま
かせか。」

それはあなたが私を心から愛していない言うてことでしょうか・・・
。

「くそやろう。」

悪態をついた。でも、少しくらいいいかな。思い出作りに。

「いいですよ。」

「おお。うれしいぞ。」
カロンは失恋のちに恋。

「カロン．．．．。」

セロンが、カロンの墓の前で、必死に頭を下げていた。

「これが正しかったのか、今でもわからない。
すまない。カロン。」

．．．．あと五人．．．．

二人目 永井光明の場合・・・愛人（後書き）

三人目は兄弟藍で描く。完璧な兄弟会いをつ！

三人目 正井信吾の場合・・・兄弟（前書き）

三人目あと四人

三人目 正井信吾の場合・・・兄弟

三人目 正井信吾の場合

俺は、明日に迫った芳樹の誕生日の買出しに行っていた。芳樹と一緒に。

今日はたまたま大学が淒く早く終わったのだ。珍しく。だから、一緒に。

芳樹は小学二年生。今年の誕生日プレゼントは、伝説戦隊レジエンジャーのレジエンドロボを買ってあげた。

今、ちょうどその帰り。俺が芳樹と一緒にいた最後の時間。

「ねえ兄ちゃん。」

俺の弟が俺の手を引く。十字路で、横断歩道を渡ろうとする。点滅しているのを知った俺は、急いで手を引いて、弟を引っ張り、歩いていく。

「ねえ。兄ちゃん。昨日学校でね、」

俺の手を握りながら、弟の、芳樹は、昨日あったことを話してくれる。

相槌を打ちながら、信号を気にして急いで渡る。

「兄ちゃんっ！」

弟が、こつちに走ってくる白バイを見つけて、俺に教える。

俺は必死に芳樹を守ろうと、芳樹の体を突き飛ばす。

ガンッ・・・。

芳樹が道路に当たった音と、俺が白バイに当たって存在が消えた音の一部が俺に、すべてが芳樹に聞こえただろう。

芳樹は、これから親と元気に生きてくれるだろうか。俺という存在を忘れて。

俺という兄がいたことを忘れて。

俺は・・・芳樹にプレゼントを渡せなかった。

兄として、最後の最後で。

それから、しばらくたった。

「芳樹……。ご飯よ。芳樹。」

芳樹は、兄との共同部屋だった部屋で、芳樹は体育座りで体が震えている。

「う……うう……。」

芳樹は、暗い部屋で、暗い心で、目をつぶっていた。

すぐ後ろにある二段ベッドの下には、もう二度と、ぬくもりが戻ることはない。上の……芳樹のところだけだ……。

部屋の芳樹のエリアではない場所にはもう、誰も入る事も、ものが増える事もない。

永遠にそのままだ。

「で、今日の蘇生者は。」今日のカロンは、少し顔が右に傾き、怒っている。仮面で見えないが、左の頬が赤くはれている。

「正井信吾。私の……学級生です。」

カロンは、顔をピクンツと動かした。

「ほう。蘇生はやめるか。」

仮面の中でカロンは怒っていた。

「何ですか？」

メリアが声を荒くしていった。

「恋人である君が、なぜか頬を赤らめて、彼の肉体を眺めているからだよ、これが恋人の反応というものなんだろう。だから……嫉妬といったか、それをしている。」

カロンはどれだけ気まぐれなんだ……。どれだけ自己中心的なんだ……。

メリアは、手がいつの間にか拳の形で震えているのに気が付き、元に戻した。

「蘇生開始。」

メリアは、カロンがそつぽを向いて嫉妬、いじけているときを見計らって釦を押した。本当に釦だった。

「あ・・・メリア。やっぱり君と彼はそういう関係が・・・何処まで進展しているんだ。何処まで私に隠した行動まで・・・ムギユン。」

カロンらしからぬ語尾で終わった。

メリアがパロを投げつけたからだ。パロはキューーンといって、メリアから遠ざかって言ったのだった。

芳樹・・・。

芳樹・・・。

芳樹・・・。

芳樹・・・。

芳樹・・・。

「そんなに弟が大切ですか。」

黒服で、仮面の怪しい男が、俺を呼ぶ。

「そろそろ冬です。その格好は寒いでしょう。ほら。この毛糸の下着を着用しなさい。ぽかぽかですよ。それとも熊さんより機関車のほうが良かったかい。」

「普通のでいいんでください。」

さむいのは裸だからか。

「さあ。弟に会いに行きなさい。」

扉は開かれたらしい。

芳樹……。

部屋は、何も変わっていない。

「兄ちゃん、ただいまぁー。」

芳樹が……まだこれから何が起こるかまったく知らない芳樹が、部屋に入ってきた。

「今日は、買い物に行くんでしょう。ねね、僕、^{えいり}頼娃吏に行きたいな。」

俺は、何も考えず、前回と同じものを同じ順番にとって、芳樹と出た。

「ねえ。兄ちゃん。今日学校でね、」

ああ。もう終わるんだ。

俺は、目をつぶった。

芳樹を必死に抱きしめる。

もう、あの交差点まで来た。

「そうだ。」

俺は、自分で思った。芳樹を抱きかかえながら。

「ここを、とおらなきゃいい。あと一回、待てばいいんだ。」

俺は、芳樹と長くいることが出来る方法を知って、うれしくなった。

「芳樹、もうすぐ赤になるからここでまとうな。」

芳樹は素直にうなずく。

一回待った。

あの白バイは、俺をひき殺した白バイは来ない。

二回待っても来ない。

俺は気が付いた。

あの白バイは絶対に俺が来るまでこないと。

「芳樹、別の道で行こうか。」
裏道で行こうとした。

「芳樹、今日は何のケーキかな。」
芳樹と、自分はこのままいれると思い、にこりと笑って、芳樹と裏道を歩いていった。

カロンはその死人を見ていた。
「ふん。そのまま自分がのうのうと生きていられるとも思ったのか……。死人が生きているという事はこの世界の理屈を覆してしまふ。そんな事、このカロンがさせないぞ。せめて後二分、最愛の弟と、過ごすがいい。永遠に会えなくなるのだから。カロンは貴様を生かしておくほど甘くはないのだ。」
カロンはグラスを叩きつけた。

俺の視界には、自動車が。右には、第一人分のくぼみ。
俺は再び死んだ。

「弟はそれほど大事か。」
男が聞く。

「自分だけ、生き返れると思うなよ。死には逆らうな。」
「大事だ。」

「我も作ろうと思うぞ。」
カロンが連れてきたのは猫だった。

弟を何だと思っているんだ。
これから更に五月蠅くなる。

・ ・ ・ ・ ・
あと四人 ・ ・ ・ ・ ・

三人目 正井信吾の場合・・・兄弟（後書き）

歩派 j 氏 w やんせあ h q こ う い v う お え r x こ f ん は お い え う い ほ
r ん d う ん く い お

日本語訳

カロンの骨、あと四話で終わったら、カロンだけの本編をするらしいデー。

四人目 冬実安威の場合・・・記憶（前書き）

本当にすみません。

カロンの骨を更新させるのを忘れてしまい。

しいていうなら、友達に書く手紙も出し遅れてたり。

更に言うなら、提出前日に作文書いちゃえと思っててひーこらいつて書いたり。

カロン書けるような状況じゃなかったんです。

そのわりに切り裂きジャックは更新してんじゃねえかだって言われてたって仕方ありません。

一つ言っと、おもしろいんですよ。すらすら自由^{フリーダム}に書けて。その分これ大変で。

けれどもきちんと二部作品も考えてありますから。

それが、きちんと出せるのかは別として。

ひーこら言わず書けねえのかよ！

なんてことは、お山の向こうに投げ出して。

そんじゃ、一ヶ月以上久々に、どうぞ。

四人目 冬実安威の場合・・・記憶

四人目・・・冬実安威・・・記憶

「メリア。私は、お前の事が生前から・・・。」

カロンがカロンの面をはずしてわたしの肩をつかみ、顔を見つめてくる。

「カ・・・カロン？」

カロンの顔が近づいてくる・・・。

「いつやあああああああああ！」

メリアは飛んだ。それを上でカロンが見ていた。

「寝ていたね？メリア君？」

カロンはいつもの面のまま、答える。

「それは許してあげるとしてメリア君、今日の私について何か違うと思いますか？」

メリアは答えた。

「なんだかとも、むかついて仮面ぶち割って、可燃物でごみに出したい気分です。」

「うつわっ、ひど！」

カロンは大げさに身をのけぞらせた。

「いつもと仮面違うのに・・・。」

カロンはふてくされた。けれど何処がどう違うのか、さっぱり解らない。

天才にも解けぬなぞだ。

「本日の蘇生者はー。」

ふてくされたままカロンは問う。

「冬実安威。一般人です。」

「メリアさんから見たら全員一般人なんじゃない？」

カロンは無視だ。

「蘇生開始！」

カロンはしぶしぶつぶやいた。

ソラから声がした。

「お前にもう一度期限付きで生き返らせてやる。ありがたく思えよ。」

その男は・・・そう、とっても美しい声で、甘い音色のようで。

私のイケメン魂をくすぐった。

「ねえ、あなたはだあれ？」

冬実安威は心の奥からその美形に語りかけたのよ！

「わ・・・わたしか。私の名前は・・・痛いではないか、メリアくん！煉瓦で人の頭を叩いてはいけないと言われなかったのかい？あと、銃で人を打ってはいけないよ。死んでしまうから。」

私の彼に向かつてなんてことをしているのだ。煉瓦に、銃なんて死んでしまう。

「ちよつと、そのメス！なにしてんの！」

美形さんは私に語りかけてくれた。ああ、うれしいわ。

「良いから、君はそのドアをくぐるんだ！」

美形さん、私は行くわ。この世の美形を独り占めするために。

私は、緑色のドアをくぐった。

美形さんが作ったのかしら。

美形さんの趣味かしら、熊さんとか、兎さん、ロケットなんか描かれているわ・・・疑問だわ。

私は、光に包まれた。なんだかべたつく、まとわりつく・・・中年親父の脂ぎった手のような・・・。セクハラだわ。

そこで思い出した。わたしのことを。

通路で立ち止まる。

デーデーデーデーデーデーデーデーデー

デーデーデードーデードーデードー

枕元から私の自慢時計からダースベイダーのテーマーが流れてくる。
もう、朝か。

私はむっくりとおきた。

机上から私自慢の自動麵麴焼機EXΩQが音を立てて朝飯を用意してくれた。

「ウン。今日も良く出来たわ。」

私は、イケメンを追いつつ、天才科学博士の称号も連邦からもらっている。

いわゆる大天才の美人ってことよね。
時間になった。

そろそろ屋外の研究所で研究だ。

今日こそは、どんな子でも言う事を聞く強制命令自動行動機《わたしのゆうことはだまってすなおにきけばいいのよ》を完成に一步でも余分に近づけなければいけないわ！

玄関では、私の開発した試作品923867号きょうはなにきをつけるべし今日確認機きがなった。
今日ハ、交通事故ニアウ確率が高確率、安全ニ注意シテクダサイ。

お気に入りの韓流美男子声で、私に教えてくれる。

けれど、これがあたたためしは一度もない。
私の四歳の発明は失敗だった。

研究所まではたったの三分だった。

研究所への時間だ。

たったの三分だった。

一本の大通りをはさんでの、三分だった。

たった三分。

けれど三分。

私は、一つの大事な事を、忘れてしまう。

【居眠り運転は、絶対にやめましょう。】

このハイテクな町の信号機では、いちいち口うるさいオバハンみたいに注意してくれる。

私は気に食わない。

イケメンにしろってんだ。

この町では、それが普通。

だから私はこんな町を換えたかった。

それが、あたし サイエンス・ドクター私が私である理由だった。

フオオ・・・・・・ン。

トラックが、耳を引き裂く音で私の死を知らせてくれる。

【危ないです。危ないです！】

トラックもハイテクだ。声で知らせてくれる。

けれども、私が開発しようと考えているのは、声で知らせず、セン

サー感知の、マジックハンドでの人命救助だ。

それが実現すれば、死なくて良かったのに。

早く開発をしたら良かった。

あんなくだらないものは良いから。

とつと人命救助用具開発に力を注ぐべきだった。

「死にたくない。」

私の声は、中に反響したかのように聞こえ、風で異国^{てきこく}へ飛んでいった。

そうだ、今度は早く戦争を終わらせられる機械を・・・。

経済戦争を終わらせられる機械を。

ラブアンド、ピースだ・・・。

今日はあの安全警報機、正常じゃん。

そう思ったけど、もう遅いわね。

「おい、女性が引かれた！救急車だ！急げ！」

見たものは白かった。

四角く正方形で区切られていて。

「あ……うう……」

奇跡的に生きていた。

奇跡だ。

今日、韓国美男子のツアー。

ヨンジェン様……。

奇跡的に生きていた。

一時的に。

命は終わった。

私が作れなかった機械が、私の命の終わりを告げる音が聞こえた。少しのノイズも、狂いもなく、ただ、同じ音の連続……。

ああ。私はあの時、記憶をなくしていたんだ。

通路で立ち止まっていた私は立ち止まって生前のことを思い出していた。

「どうした、行かぬのか？」

イケメンさんが聞いてきた。嬉し！

「うんいいの。私はあれで満足。」

「機械の開発はいいのか？」

うなづく。

だって、精一杯やったもの。

「そうか。お前の考えていた事はわかってる。記憶は、大事な。また、それを支える、お前の頭脳もまた……。」

体が消えていく。

私は光になって、風になって、世界になって、宇宙になった。

「記憶は大切だな。安威。」

カロンは、生前のことをかすかに思い出し、つぶやいた。

「よし、我も日記をつけ、記憶を大切にしよう。」

そのとき、カロンの面にひびが入った。

同時にカロンに激しい頭痛などが襲い掛かる。そしてそれが絶頂まで達したとき……。

「ぐふ・
あはあ
。」

床にカロンが倒れ、カロンの周りを液体が赤く染めていた。カロンは右手で、先の通路に手を伸ばした。

カロンが救いを求めた人間らしさ。

その人間らしさに、メリアは気が付いて上げられなかった。

カロンは、意識を失った。

[illegible]

四人目 冬実安威の場合・・・記憶（後書き）

次回、カロンはどうなるの！教えてーメリアサーン！

「五月蠅いです、貴方もこの千本如雨露で消えますか？良いですよ、無料サービス中ですから。」

やめてください。ホントに投げないデー！

「続きますよ。」

五人目 時津雅直の場合・・・存在（前書き）

カロンの骨。

骨って何なんでしょうな。

カロンの骨って、なんか意味あるんでしょうくわあ？
ふざけて始まる、カロンズボーン。

第五話。

五人目 時津雅直の場合・・・存在

五人目時津雅直の場合・・・存在

空白の時間で・・・考える事がある。

自分はいてよかったのだろうか。

僕はそう思うことが多々ある。

僕は、何のためにここにいて、何のために存在しているのか。

それは、まだ誰にもわからないことだ。だからこそ、それ関係の本は売れている。

けれどその本にも僕は救われない。

助けて・・・。

ビルの谷間に見える真紅の円。紅の太陽。

それに僕はとらわれた。そして僕の最後を見てほしいと思う。

ビルの谷間に見える真紅の円。紅の太陽。

それに僕は魅了された。それゆえに、見える場所で散りたい。

ビルの谷間に見える真紅の円。

ビルの谷間に見える

ビルの谷間

ビルの谷間から送られてくる声^{かぜ}が背中を押す。

何も怖がることなんてないんだよ。僕らがきちんと連れて行ってあげるから。さあ、お行き。

風が語りかけてくる。

「ありがとう。」

眩き終わると同時に、ビルの谷間から見える真紅の円と、ビルの谷

間から送られてくる声につれられて、僕は、風になった。人ではなくなった。

ただ単に、存在していようという意味がなかったからだ。

僕がいなくてもここは生きていける。

僕がいなくても世界は永遠に回り続けるんだ。

ビルのしたのコンクリートの歩行者用通路、早朝、警察が事件とみなしてやってきた。

暗い霧に包まれている。

光がない。

僕を魅了して止まなかったあの真紅の太陽は？

無音に包まれている。

風がない。

僕に語りかけてきてくれたあの、神聖な声は？

「なにを言う。君は自殺したんだぞ。そんなものはなくなるに決まっている。それと君の浅学について、地球は永遠じゃない。消えてなくなる日が来る。おろかな人類という寄生虫に蝕まれた大きく偉大な一つの生命体は……。」

少年のような声が、聞こえた。

「我が名はカロン。貴様に今一度だけ、人生を期限付きでやろう。」
「いらない……。そんなものを必要としない。」

この世界でも、僕の存在はない。そうなんだ。そうだったんだ。

「自分が何かわからないのだな。」

はい。そうです。僕は誰で何のために存在して何のために……。
「ならば特例措置。話を聞いて開放してやろう。」

開……。放？

「存在を、風にしてやろう。」

僕を魅了したものに、僕がなれる？

「そうだ。君は存在しなくてもいい。けれどそこにいてくれるだけでいい存在になるんだ。」

それこそ僕がなりたかったもの、成し遂げたかった事のひとつだったのかもしれない。

「存在はあったほうがいいのか？」

いいえ。存在は要らない。僕はそのまま存在しないものとしていなくなりたい。消えたい。

「ならば、話はそれだけだ。逝くがいい。哀れな一人の寄生虫よ。偉大な生命体を守る一つの壁となり、守るのだぞ。」

彼は逝った。

「このような形でよろしいのですか、カロン。」

カロンはこちらに歩み寄り、低くつぶやく。

「人、それぞれ・・・なのだよ。人それぞれ・・・。」

カロンは自室へと消えた。

カロンは最近何かが変わった。

昨日なんて、カロンは血だまりの中で倒れていたじゃないか。それが今日はあんなに元気になるなんて。

メリアは腕時計の昨日を起動させた。

そして気が付いた。

「カロン。貴方もそろそろなのね・・・。」

いつも五月蠅くやんちゃで小賢しくて憎たらしくて殺意が持てるカロンは、もうそろそろなのだ。

「カロン、貴方は何をおいていくつもりなのですか・・・。」
メリアは、ないていることに、心底驚いた。

カロンは、どこかに消えていってしまうようなそんな感じで。

「アウ！アウアウ！」

「パロ……。」

メリアは久しくパロのぬくもりを感じ取った。

「パロ、貴方も感じているの？」

パロはうなずいた。知っているのか否か。

「パロ、さあ、行きなさい。」

パロを開放するとパロは廊下へと走り去った。

そして、死者蘇生装置の上で、サイタがいる。

「貴方も……なのね。」

メリアは、ゆつくりと部屋を後にした。

「カロン。メリアは私の者だ。カロン、君にはわたさない。メリア・……登美永……私を呪い殺してくれ。」

カロンの基地の前で、セロンは、一人重装備で入ってきた。

「セロン……。君……なのか。僕を……僕を……。」

カロンの脳裏に何かがよぎる。そして、カロンはベッドで倒れ、そのままその日を終えた。

五人目 時津雅直の場合・・・存在（後書き）

カロンスボーン、第一部いよいよクライマックスって感じですね。
あと二人！

頑張れ、カロン！はて、何を？

我は一体何なのだ？

六人目 亜禎耀誇・・・同一人物（前書き）

カリンの骨
カロンの骨

六人目 亜禎耀誇・・・同一人物

拝啓 登美永様

この度の貴方の発明品、死者蘇生機械は素晴らしい作品でした。つきましては、私は機械を作り、部活動唯一の女性も取る貴方が憎いので、殺害しようと思います。

そのあかつきには、貴方を死者蘇生機械で生き返らせようとお思います。

それでは、余生をお楽しみください。

K h

それを受け取った中学生、登美永と言う子は、それから数日後、手紙に書かれているように、この世界から消えてしまった。

地方紙の片隅に、ちらりと載った事件だった。

開く。

今日も私は書を

そして自作ノートにそれらをまとめる。

今日の仮題は世界の不思議超百科を読むことで決定。

雪男から始まったそれは、あまり私の興味をそそらなかった。
ただ一つを除いては……。

ドッペルゲンガー

私が最近しょっちゅう見るもう一人の私。同一人物。

それを見たものはドッペルゲンガーによって殺されてしまうとかかれていた。

つまりは、死に易くなるってことらしい。

私は死ぬのか。

だとしたら聞いておきたいことがあった。

それから私は有り余っている有給休暇を全て一気に使うために、連邦軍特殊工作部隊秘密侵略道具開発部部長の仕事を休んだ。目的はただ一つ。

ドッペルゲンガーにあって一つの事を聞くこと。

私にいたはずの双子のお兄ちゃんを探す。

連邦軍特殊性別々身体構造研究調査部に贈られてひどい目に合わされているらしいと母から聞いた。

なら連邦軍にお兄ちゃんを送らなければいいじゃないかと思ったが、連邦軍はわが国最大にして最強。逆らうものには、死を持って感謝を現す残酷な奴らだ。

私はそこに入ろうと思ったけどすれすれの点数で落ちた。入れるのはその次に偉いといわれる連邦軍特殊工作部隊秘密侵略道具開発部だった。

未だにお兄ちゃんは発見できていない。

話に聞くと人間とは思えないようなひどくアレな身体実験をさせら

違う、私はドッペルゲンガーにこんなことを聞きたいんじゃない。
私は貴方に消えろといい続けてるだけじゃない。

「おし・・・えて。おにちゃん・・・何処？」

私たちが、私に歩いてきて耳につぶやく。

「私のお兄ちゃんたちはね、連邦軍で部分部分にばらばらにされちゃったの」

私たちが教えてくれる。

「私のお兄ちゃんたちをばらばらに醜い肉の塊にしちゃったあいつらにはね、わたしたちがばらばらにしてあげたのよ」

オニチャンハイキテハイナイ・・・。

「私たち、お兄ちゃんに会いたかったのに。あいたかったノニ・・・」

その言葉がどんどん私をカオスへと導いていく。
私たちによつて私の中には黒いものが生まれる。

「ねえ、私たちで出来る事、なあい？」

答える。

「れんぼぐんを爆破させる、」

翌日、新聞には大きく一面を飾った。

『連邦軍特殊工作部隊秘密侵略道具開発部新兵器大爆発か？』
首謀者には、女性の名が出ていた。

「そこまでして会ったドッペルゲンガーは大切だったか？」

絶景の美少年がこちらに微笑む。

「いいえ、いらないわ。私に私たちは必要じゃないもの」

「そうか、ならば、帰るか？」

美少年は問う。

「ええ。私はもう、いいわ」

「ならば、この扉から、還るがいい」

私は、心の中にいる私たちと一緒に扉をくぐってお兄ちゃんの元へと帰っていった。

メリアは血肉沸き踊るメロドラを見て泣いていた。

『ボクと年下美少年とのいとおしい愛』

いわゆる少年と少年の愛物語だった。

どうでもいいか。

「メーリー・アー」

カロンが駆け込んでくる。

ささっとメリアはチャンネルを変える。

これを見ているとばれたらねちねちやられると知っているからだ。

「『ボク少』、おもしろいー？」
ばれていた。

カロンは自室で服を脱いだ。
全裸だ。

テレビをつける。
ベッドに転がる。

その姿勢でSTOPウォッチを手にとるとささっと服を着込んだ。
「よし、新記録！」

単に服の早着込みだった。

テレビの早着込みのコーナーは、いつもカロンの埋まっている。

「カロンの。許してくれとはいわん、もう一度、死んでくれ。」
セロンがカロンの基地に入り込んできた。
「ワウツガウウ！」

パロがセロンに噛み付いてくる。

「邪魔な・・犬があ！この、私にたてつくと言つのかああ！」

セロンはパロの顔を散弾銃で吹き飛ばした。

パロは、数メートル吹き飛んで肉の塊になった。

「お前もはむかうのか？」

後ろにいたサイタの頭を蹴り飛ばし、首をつかんで壁に叩きつけた。

「私は、今日、カロンの首を取るんだああ。」

二度に告ぐ散弾銃の音は、カロンにも、メリアにも聞こえていた。

カロンはゆっくりと武装し部屋を出て音のするほうへと近づいていく。

メリアは自分の手を見つめて、それから部屋を走り抜け、音へと向かう。

「きてくれたのかい？セロン君」

「ああ。きてやったぞ。カロン」

しばらく、沈黙が続き、カロンが口を開く。

「また、殺しに来たのかい？」

セロンが散弾銃をカロンに向けて言う。

「もちろん」

「やめてください！」

メリアの叫び声とともに、カロンの頭に散弾銃の玉が、

メリアの叫び声とともに、セロンの腹にサバイバルナイフが刺さった。

そしてメリアが息を呑むのと同時に、二人は通路に倒れた。

六人目 亜禎耀誇・・・同一人物（後書き）

次回カロンの骨完結予定！

カロンとセロンとメリアの関係は？

七人目 登美永雄姿？ S t a r t（前書き）

カロンの骨 七人目篇！

カロンの骨完結させるためにがんばっています。

七人目 登美永雄姿？ Start

「おれな、もうすぐアレ、完成するんだぜ！」

あいつからそれを聞いたときはすごくうれしかった。

俺たちで作り上げていたものが、やがて完成するとわかったからだ。

「俺ら二人で」

そのときあいつがなんていったのか、わからない。もう忘れた。覚えていてはいけないことだからだ。

わかつているのは二つ。

俺とあいつは友達だったこと。

俺は、この手で自分の親友を……。

親友の名前は登美永雄姿。研究ネームはカロン。

俺の名前は火向居謙太。研究ネームはカロン。

カロンと俺は中学校の機会部所属だった。

親友だった。彼女がくるまでは。野郎二人で持っていた部活。そこに女生徒が入ってきた。

「俺はお前が許せない……。」

このときの俺は怒っていた。

彼女が告白してきたというのに、彼は、セロンは断った。いつものごとくマイペースで。

俺と二人のときのようにあのふざけた仮面をつけたまま。

あんなふざけた死者の面をつけながら……。

彼女は弱みは見せなかった。

けどセロンのせいでへこんでしまった。俺は彼女のそんな子よりも笑っている顔のほうが好きだ。

だから、その償いを、セロンにはしてもらおう。

それは、俺たち親友の中の終わりを告げるものであり、俺たちの存

在自身を終わらせることだった。

「セロオオン！」

カロンが大きく跳躍し、セロンの右ほほを打つ。

「カロン・・・！」

セロンも負けじと地面をすべるように移動し、カロンの左ほほを打った。

「やめつてっ！」

メリアの涙も何のその。男二人は殴り合っていた。

そのうちにカロンは剣を、セロンは銃を取り出した。

パロを撃ち殺した銃で、カロンを撃つ。

カロンは剣の峰で銃弾を弾き、銃身を切断する。

「お前に二度は殺されない」

そういったカロンの目は赤く光、血走っていた。それから剣の峰でセロンをたたき倒す。

「俺はお前に二度も殺されてたまるか」

剣の峰と刃を入れ替え、セロンに向けるとカロンは叫ぶ。

「俺はあのと時のように簡単には死なない。俺は人間を知った。あのころのように無知で無邪気な俺ではいられない。俺はお前を今度こそ殺るきでいる。」

セロンはカロンに抑えられたまま、カロンはセロンを押さえつけたままにらみ合っている。

「あの時の様に、手加減はしてやんねえー。思いつきり、斬る」

セロンはそれを最後まで聞くとカロンを押しつけ、懐からサバイバルナイフを取り出す。

「いいたいことは、それだけか？なら、今度こそ逝けよ。この死人が」

感情なく、セロンは床を蹴り飛ばす。

「いいたいことはこれだけだ。今度はお前が逝って来い」この裏切り者が」

にこやかな笑顔でカロンは壁を殴りセロンに剣で切りかかる。

「俺は、お前を生かしておかない！」

セロンは叫んでナイフでカロンを裂く。

右頬を裂かれたカロンは痛みには耐えながら、剣でカロンの脇腹を斬る。

「俺はカロン。すべての上に立つ、生者を生かし、死者を殺す力を得た、メカニカル、カロンだ」

メリアが遠く、あの時の様になる二人を見ていた。

あの時も二人は、こうやって屋上で・・・。

ひとつの剣とひとつのナイフが空中で交差し、火花を散らした。廊下は赤く光、生者を招いている。

七人目 登美永雄姿？ Start（後書き）

最近某歴史漫画を買ったんです。

そしたらとっても良い所でしばらく休みます。のあとがきが。
めちやくちゃ面白い漫画だったんで悲しくなりました。

そしたら近日再開予定で日付はすでに再開しているそうです。

秋には最新刊が数年ぶりに出る模様。めちやくちゃうれしくなりました。

なにいつてるのかというと、こんなくだらない物語でも、読んでもれる方はいらつしやるわけです。あなた様のような。そんなお方にも、私のような凹む思いをさせていたのですね。どうも申し訳ございませんでした。

それから、この漫画が何かわかった人はお知らせください。ちょっと、私と一緒に語り合いませんか？

ヒントは某新撰組漫画です！

次回のカロンの骨も首を短くしてお待ちいただけると幸いです。どうか、よろしく願います。

もう、ゴールデンは見えているのですから。

七人目 登美永雄姿？ A C l o s e F r i e n d (前書き)

俺たち、いつまでもずうずうつと、友達、だかな。
忘れんじやねえぞ。セロン。

俺より馬鹿なお前のほうが先に忘れんなよ。カロン。

それは、二人が親友だったときのこと。

七人目 登美永雄姿？ A Close Friend

その日俺とカロンは、二人で学校帰りの公園にいて、二人でブランコに座って話していた。

本当は、ここには変な男の子にはつかはなしかけてくるおじさんが居るんだけど、今日はまだその時間じゃない。

「俺たちはさ、いつまでもこんな風に友達でいようぜっ」

カロンがあまりにも古臭い、ありふれた言葉を平気ではくのでつい、噴出すとカロンは脹れっ面で俺をつつく。

「なんだよセロンー、俺、まじめに言っただぜ？何で笑うかなあ」その台詞でも再び腹を抱えて笑う。

「ったく、セロン、俺は本気で言っただの、笑わないで真面目に聞いてくれっかなあ・・・。」

それでも笑い終わらない俺を見てカロンはブランコから立ち上がると、俺に背中を向けしゃべった。

「俺たちはさ、いつまでもこんな風に友達で居ようぜっ」

それからカロンは走ってベンチにおいてあるかばんを取り、俺に顔を見せてくれる。

「ほら、セロンそろそろ帰ないと出てくる時間だぞ」

腰に手を当て、前かがみになって注意するソイツを見ると、へたな女よりもぜってえーにキレイだと思う。

別に、俺はカロンがすきってわけじゃないけども。

ほんとに、事務所にでも入ったほうが良いんじゃないかと思うほどに。

俺たちはいつまでもこんな風に友達ではいられないんだよ。カロン。今の俺は、そのときのカロンにそう答えられるだろう。笑ってばかりいないで・・・さ。

血でぬめぬめする廊下で血なまぐさい戦いをまだ俺たちは続けている。

俺はカロン。死者復活装置を作り、親友に屋上で突き落とされた友を恨み死んでいった元々生存者の元死者で現生存者。

今日、セロンを乗り越え、俺は俺としてもう一度生きる。

昔のことが鮮明にひとつずつ思い出せる。

俺がセロンなんかにならずと友達で居ようといったこと。

くだらない。くだらないくだらないくだらないくだらない
い……………い……………い……………い……………

俺はこんなやつと今まで居たなんて、本当にくだらない。

今日、ここで俺たちという物を断ち切る。

俺はすべてを終わらせる。

こいつの命ですべてを終わらせる。

俺のこれまでの悪もすべて。

俺は、親友に殺された。だから、親友が本当に必要なのか、田沼俊之に聞いた。

俺は、メリアに告られた。だから恋人が居るのか永井光明に尋ねた。

俺は、兄弟も親友に殺された。だから、本当に愛する肉親は必要だったのかを、正井信吾に問うた。

俺は、殺されたときつらかった。ゆえに、記憶は必要なのかを冬実安威に答えてもらった。

俺は自分が居て良いのか不安になった。だから黒田岳秀に聞いて。

自分は何かがわからなくなつて浅田洋子に聞いた。

それから、それから……………

俺は、最後にこいつに聞きたい。

「お前にとって、俺は、何なんだ・・・？」

俺の剣がセロンの額を指し示したそのとき、俺はセロンに聞く。

セロンが意味ありげに微笑んでゆっくりその汚い口を開く。

「決まってるじゃないか。俺たちは親友だろう？」

俺も笑いながら口を開いてこの口でセロンと同じ言の葉を発する。

俺は剣をしまつて。

彼はナイフをしまった。

俺は右手をセロンに差し出した。

彼は俺に右手を差し出した。

お互いにその手を握る。

俺はセロンを引き上げて立たせて、笑いあう。

セロンは俺に引き上げられて立たせられ、笑いあう。

俺はセロンに昔のように笑ってしゃべりかけた。

それを見て、メリアがほっとした顔で座り込む。

俺たちは和解できたんだ。

ホントウニ・・・？

七人目 登美永雄姿？ A C l o s e F r i e n d（後書き）

A C l o s e F r i e n dとは、英語が得意な方はわかるでしょうが「親友」です。ちなみに আমরা 英語何ざくそ食らえ派なん
でこれは携帯電話様に大変ご活躍していただいております。

ビバ 携帯！

めっちゃ役立つねんな。計帯電話って。

なんか使い方間違ってるようなきもしない新高校一年生です。

ふと思えばもうここに来て三年以上か・・・。

四年目もがんばりますですっ！

もうここが和呼之之暇な時間セコンド【セカンドじゃねえ！セコンドだ！】扱いですねい

七人目 登美永雄姿？ An Old Friend（前書き）

私たちはもう、元の三人に戻ることは出来ないから。
機械部にはもう、入れないから。

でもね、私まだ退部届けださないで転校したんだよ

七人目 登美永雄姿？ An Old Friend

「ふざけんなよ。」

俺はセロンの手をはたき落とす。

俺たちは若いなんて子供のようきれいにいかない。

もう子供ではない。

仲良しこよしの「ごめんね」なんかではすまないことを知っている。

大人でもない俺たちは、醜いやり方も知らない。

だから、解決方法は力ずくだと思ってしまっているだけだ。

とにかく、許さない。

俺はセロンを

許さない。絶対に。

俺はカロンを

「誰が俺とお前の楽しかったときの約束を言えって言った？俺はお前何かって聞いたんだ。コトバアソビをお前としてえーんじゃねえんだよ・・・。謙太あ！いい加減にしろよ・・・。」

しまっていたはずの剣を再びつかから出す。

「俺はお前に何かって真剣に聞いてんのによ、おまえはいつてえ、なんなんだあああああああ！」

狂乱しながら剣をひたすら振り回す。

「お前は俺に聞いただろ・・・。俺はお前にとって何者か。答えただろ。」

にやっと笑って俺の剣を弾き飛ばす。それはメリアの付近の床に刺さる。

俺の首にサバイバルナイフを突きつけて、口を開いた。

「おれたちさあ、し・ん・ゆ・う。だろ・・・。」

手が自然とこぶしになって、震える。

「っざけんなあ！」

ナイフを殴り飛ばし、反対の利き手でセロンの頬を思いっきりぶん殴る。

「お前は、どこまでふざけんだ。俺は、親友じゃねえだろおがぁ」
馬乗りになった俺はセロンの頬を殴り続ける。

セロンの頬は血で染まる。俺のこぶしから流れ出る血だった。

突然手がつかまれ、横倒しに飛ばされる。

「いつまでも博士だと思っていい気になってんじゃありませんよ
お。。。ゆーしくん♪」

俺たちが最初に出会ったとき、セロンが話しかけてきた。

「ねえ、君ゆーしって言うんでしょ、ぼく、けんた。これからよろしくね！」

初対面は印象が大事だった。けど、本当は内面が大切だと今子供でも大人でもないチュウトハンパな俺が気がつく。

俺はそのまま転がり続け、メリアの傍らに飛ばされた剣を拾い、構える。

「も。。。やめ。。。て」

メリアがつぶやく。

「ごめんな、由香利。おれたちさあ、もう、殺したいやつと殺したいやつになってんだよ。あのとときみたいにもう三人じゃ研究できないな。ごめんな。でも、俺は。。。我輩は必ずお前ともう一度楽しいことすんだ」

メリアがゆっくり頭を上げて俺に聞く。

「また、私を。。。からかうんですか。。。？」

その顔を見て俺は仮面をはずす。

「ちよつとさ、血で汚れちゃったけど、預かっててくれっかな、必

ずとりにくつからさ」

死者の面の紐を切ると、メリアの首にかける。

「あのときの答えだけどさ。俺はお前のことを好きだし、楽しかったさ。だから必ず・・・」

カロンとセロンの剣の刃が再び交じり合う。

「いいご身分だなあ。フツタ女に付き合えだあ、俺はお前みたいな神経もてねえよ！」

俺は目ですべてを語る。

「うるせえよ。殺人鬼」

「だから必ず・・・我輩の研究に付き合え。p・177・我輩の命令だ」

カロンは雄姿だ。セロンは謙太。私はどっちを応援すればいいんだろうか。

ねえ、パロ。私はどっちが好きでここに居るのかなあ・・・。

冷たくなっているパロを抱きしめ、体温を分け与えるかのように包み込んでいった。

私にはもう、貴方達を止める事は出来ないから。

殺めることは出来るとしても。

七人目 登美永雄姿？ An Old Friend（後書き）

今回のタイトルルの日本語訳は旧友。

なんか英語でも辞書引けるのは単語だし。

英文を日本語に変換するようなソフト入れたいなあ。

どんなのがあつてドン位するか知ってたら教えてくれませんか。

それで今後のタイトルルに英語が出来るTAT Y

感動もんやで。

なんかエーゴできるやつっぽくてかつこついい・・・。

七人目 登美永雄姿？ P E A C E M A K E R (前書き)

カエレナイ

七人目 登美永雄姿？ P E A C E M A K E R

七人目 登美永雄姿 P E A C E M A K E R

P - 177 . それは私につけられた研究番号。私の研究の名前ではなく、研究物体番号。

私の血は特効薬となり、毒となる。よく言われた。おまえは P E A C E M A K E R になるんだって。

P - 177。それは、私の幼少時代のサイッターな思い出。だからカロンにそれは言わせたくなかった。

それは部室でも同じで。

私をからかうカロンをセロンが止めて、私がへこませる。体の一部を拳、もといは物で。

それは二人の些細な喧嘩の時も同じ。

「二人は今、ただけんかしてるだけ。何でしょ」

パロを廊下に置くと私は立ち上がる。

戻らない時間があつたとしても、私にとってはそれがすべてだから。私にはその時間しか残されては居ないから。

今から私は時間を取り戻しにいきます。

二人を動かなくしてでもあの時の様に。

私は、パロが好きだった。

なんだかんだ言っても。

動物虐待はいけないことなんだよ？

雄姿、謙太。

バカヤロウ。

「いい加減やめなっさいっつつつつつ」

メリケンサックモドキをつけた私の拳は、二人の腹部に直撃する。私は口を開く。

あの時の様に。

「もう、部活始まつちやうよ？」

あの時と違うのは私の頬はぬれていて、彼らの手には人を殺める物が握られていて、それでちよつとぶざけ合っている事。ただ、それだけ。

セロンが狂乱の目で私を見つめる。

「何言つてんの？おれらさあ、もーちゅーがくせーじゃねーっつうの。ばっかじゃねえ・・・」

謙太はもう、コワレテシマッタ。

カロンが私を視ずに呟く。

「これは部活動じゃないんだよ・・・」

雄姿はもう、カワツテシマッタ。

私も現実にはわかっている。
もう、戻れない時間があることを。

帰りたい。

返りたい 孵りたい 還りたい かえりたい カエリタイ。

私はあのころの私たちに帰りたい。

私は P E A C E M A K E R になれない。
私になれるのはすべてを壊す S o m e t h i n g

私はすべてを終わらせる。
カロンもセロンもメリアも。

すべてを終わらせる。

七人目 登美永雄姿？ P E A C E M A K E R（後書き）

カエラセテ

七人目 登美永雄姿 R U I N S (前書き)

それは、いつ起こるかも定かでない、いつかのお話。
起こるのか、起こらないのかも、誰にもわからない。

七人目 登美永雄姿 R U I N S

カロンの骨

俺はセロンが友達として好きだった。
なのに、これですべてが終わった。

俺が立っているこの場所には、セロンという名前だった謙太はいないし、メリアという名前だった由香利も居ない。

俺はここで一人きりになった。

残されているのは俺のシロ。

装置だけが残っている。

死者蘇生装置。これがすべての始まりで終わりなんだと思うと、馬鹿らしくなる。

ふと死者の面をなおそうとして手を顔にやると、そこはカロンではなく雄姿の顔だった。

死者の面はメリアの首に残っていた。たぶん。

今の雄姿には見る事が出来ない。

見たくもない。

自ら招いたこの惨劇を。

自分で見られるほど大人じゃない。

誰がこんなことを予測したんだろうか。

死者の面はたぶんこの瓦礫の下で朽ち果てるだろう。

セロンがつけていた生者の面も同じく、朽ち果てる運命なのだろう。

俺はこんなところにいたくない。

どうしたらいいんだろうか。

何で俺はこんなところに立っているんだろう。RUINS廃墟に立っている俺はなんだろうか。

カロンの骨。

俺が自ら名づけたこの場所も、すでになくなった。

俺がカロンの骨と名づけたものはたくさんある。

この場所に、俺の大切なものに。

俺の骨はカロンの骨ではなく、雄姿の骨だ。

カロンの骨は、ここで無くなる。

カロンの骨っていったい何なんだろう。

俺は何でこんなRUINSにいるのか……。

わからないわからないわからないわからないわからないわからないわからない

俺はひざを抱えて一人、うずくまる。

カロンはここで、消えるかも知れない。

二人の亡骸を感じ取りながら、俺、雄姿とカロンは消えていくだろう。

七人目 登美永雄姿 R U I N S (後書き)

これは、いつかのお話。

七人目 登美永雄姿？ A N E N D

私は、カロンとセロンに拳を思いっきり叩き込む。

俺は、カロンとメリアに容赦なく隼拔刀する。

俺が、セロンとメリアを赤く染める。

俺が

私が二人を殺してしまうんだ。

俺が

それが、終わりになった。

散々殺しあっていた二人に脳震盪を起こされ、また、メリアは出血多量で地面に倒れる。

息が荒く、その息だけが空間を支配する。

ただ、荒い息でその場を包み込む。

「我輩は、ただでは死なないぞ」

カロンは懷からスイッチを取り出す。

「これはカロンの骨の崩壊を意味する機械。これで、お前は死ぬ。メリア、こんなことに巻き込んで本当にすまないと思う」

カロンはボタンを押した。

カロンの骨は崩壊した。

崩壊したカロンの骨のから一人の人物が立ち上がる。

周りを見渡し誰もいないことに気がつき、深呼吸をする。

誰もいない世界に一人を味わう孤独。

「なんかこえーよお」

口に出して呟く。

部活の合言葉は、もう返ってこないで空へと吸い込まれ、そして消える。

風船のように長く宙を飛ばず、その場で消え去った言の葉。

それを人は見届け、歩き始めた。

七人目 登美永雄姿？ A N E N D（後書き）

次回、本当にカロンの骨完結！

とはいえカロンの骨プロローグだけ先行配信しちゃってますけどね
い。

それでは次回のカロンの骨講釈で！

えへへー好きな漫画の真似して逃げますさようなら。

七人目 登美永雄姿？ FINAL START（前書き）

これで終わりです。

めちゃくちゃへんな話だなあ・・・。

こんなのしかかけないのがなんか悲しくなるな・・・。

誰か一緒に作ってくれる火といませんかねえ・・・。

七人目 登美永雄姿？ FINAL START

世界は回っている。回り続けている。

彼女とアレを取り残して。俺もやがて、置き去りにされてしまう。

思えば出会いも分かれも単純なものだったと思う。

ただ、思っているだけなので実際には、とっても不思議なことだったのかもしれないが。

カロン。

俺が自ら名づけたその名前は、俺が何かとあると使っていたペンネームでも、ミドルネームでもある。俺が何かと使っていた名前。そしてそれにあやかり名づけたここは、カロンの骨。

俺ことカロンを支える場所。人体を支える骨をもしてなずけられた場所。

俺の始まりであり、終わりであるところ。

カロン。

それが俺だった。

「なんか・・・こえゝえ・・・よ」

一度死んだ俺は、死人の癖に死を怖がっているようだ。

あの時は怖くはなかったのに。というか、その前にイツちゃったからかもしれないけれど。

変わり続ける世界を睨み、俺は天を仰ぎ倒れる。

俺はすでに死人だから、アッチのことはすべて知っているつもりだ。たった一年いただけだけど。

右目の端に映るは俺が作り、俺が作った死者蘇生装置。

俺が作り上げ、俺が生き返らされた装置。

「皮肉である。我輩が作ったもので我輩はこつも同じ目にあつものかと。」

作らなきゃよかったのかもしれないと思いつつ、俺は目を閉じる。好めは二度とあかないかもしれない、空を見ることがないかもしれない。

いや、見ることなどないだろう。

俺は手を空へと伸ばす。

「~~~~~」

俺が生きていたときにはやった歌を口ずさむ。

あたりに響くは俺の歌。

やがて。

その音すらも。

宙に吸い込まれ溶け込んで。

静寂を生んだ。

その静寂は永遠のもの？半永久的なもの？

俺、登美永雄姿ことカロンと、由香利ことメリアと俺の親友パロ。

そしてアレことカロンは同じ日の同じ場所、ほぼ同じ時間でこの世をはなれた。

次は誰がこの機械を使う？

大切な人を失った誰か？

会ってみたい憧れの誰か？

それとも……。

世界を壊してくれるような、誰か？

俺にはわからない。

作った製作者にそれを見届けるだけの月日は残されていなかった。

死者の面は、遠くと奥深いところから来た何かを持ち去った。

「これはわれにこそふさわしいもの。貴様らにはもてあましてしま
うだろう。この惨劇もこれがもたらすものなり。この我、マリーネ
が責任もってこれを有効活用してしんぜよう。」

マリーネというやつが死者の面を持ち去った。

元のところに戻ろうとしたやつは、首を回転させてあるものを見つ
けた。

「これはこれは。死者の面とついになる仮面、これもこの世にある
とはしらなんだ。ほお……。死者の面だけでここまで逝かぬと思
っていたが、これもあるのであれば、それもありうるか。」

セロンがつけていたその面を拾うとマリーネは空へ投げる。

その面は光を反射して地面に落ちるために落下してくる。

マリーネがしゃべっていた音と、面の動く音以外なかったその場所
に面だけの音になり、地面に面が落ちて……。

再び、あたりは静寂による支配に戻る。

「さあ。これですべてが終わり、始まった。」

「これにて哀れな少年少女は死んでしまい、世界は動き続けるのであろう。」

「滑稽。真に滑稽也」

七人目 登美永雄姿？ FINAL START（後書き）

カロンの骨これで完結です。

こんな意味不明な作品に最後まで付き合ってください読者の皆様方。本当に、本当にありがとうございました。

そしてこんなものしかお送りできない私の文才のなさを堪忍してください。

それではまた次回作で。

カロンの骨っていったいなんだったんでしょうか。

一応、主人公の秘密基地みたいな意味でしたが・・・。

わかりづらいですなあ・・・。

でも一応、骨は人間の体の一部を支える重要な一部じゃないですか。カロンもこの場所があつたから支えてこられたんだよー、見たいな風に思っと思えればそれで滑稽、いや結構です。

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9017e/>

カロンの骨

2011年10月4日21時32分発行